

訪問看護ステーションと作業療法 看取りも含めて

特集にあたって

地域包括ケアシステムが深化する中、在宅医療の推進も一層進められている。その役割としては、円滑な退院支援、日常の療養支援、急変時対応、看取りの4つが挙げられている。その一翼を担う訪問看護ステーションは、在宅医療だけでなく介護との橋渡しの役割もある。ひとことで在宅医療といっても対象者は、医療的ケアが必要な人や、中重度者、精神障害者、医療的ケア児等、多様である。緩和ケアでは、医療的ケアだけでなく、在宅でその人らしく最期を迎えられるよう支援する。その支援は、活動と参加を状態像に合わせてできるようにするだけでなく、ご本人の意思がどこにあるのか、その意思がどのような作業で表現できるのか、ご本人に加えてご家族の意思をも考えていくことが必要である。それが、在宅医療でのOTの役割であり、訪問看護ステーションでのOTの役割ではないかと考え、今回の企画とした。

ご本人への作業療法はもちろんのこと、ご家族への支援、さらには医師や看護師からOTへ求める役割も執筆していただいた。明日からの作業療法へ活かしていただき、ご本人らしく最期を迎えられ、その後ご家族が生きていける作業療法とは何か、あらためて振り返る機会となれば幸いである。

(関本 充史)

企画担当

関本 充史 (株式会社リニエール, 作業療法士)

長野 敏宏 (御荘診療所, 医師)

山本 伸一 (山梨リハビリテーション病院, 作業療法士)